

文藝春秋新社

田鍊三郎

鍊立川文庫

田幸村

柴鍊立川文庫

真田幸村

鍊

昭和三十八年十二月十五月初版

定価 三八〇円

著者 © しば た れん さぶ ろう
柴田鍊三郎

発行者 小野詮造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

目次

柳生但馬守	五
名古屋山三郎	三七
曾呂利新左衛門	六九
竹中半兵衛	一〇一
佐々木小次郎	一二七
拔刀義太郎	一五三
清酒日本之助	一八三
風魔鬼太郎	二〇九
山田長政	二三七
徳川家康	二六一
伊藤一刀斎	二八五
大阪夏の陣	三一

装帧
三井永一

真田幸村

柴鍊立川文庫

柳生但馬守

一

慶長十九年十二月下旬、徳川家康は、大阪包圍陣を解ほどき、京都二条城に還かえった。大阪冬の陣は、

つた。

大晦おぼつしきの朝、家康は、ひそかに、居室に、柳生やぎう但馬守宗矩たじまのかみむねのりを呼んで、

「淀君を、奪いとるてだてはないか？」

と、問うた。

「真田左衛門佐幸村が、大阪城に在るかぎり、尋常きょうじょうの策略さくりやくをもつてしては——？」

と、但馬守は、首をひねり乍ながら、

——大御所ふも、老ふけられたか？

と、思った。

將軍秀忠が、十二月五日に、大阪城を総攻撃して、一挙に、烏有に歸せしめんとするや、家康は、突如として、

「ならぬ！」

と、しりぞけ、講和を申し渡したものであった。

秀忠は、流石に、色をなして、その真意を糺した。

家康は、慊然とした面持で、

「古今無比の堅城じゃ。手に唾ただけでは、抜き難い。これを陥落せしむるには、二つの方法しかない。総構えを破壊して、濠をこごとく埋めてしまうことがひとつ。内応者をつくって、城内を混乱せしめることがもうひとつ」

「水ももらさぬ包囲をもって、飢餓に陥らしむる手段もありまするが……」

「それは、武士として、とるべきではなからう」

家康は、講和の条件として、

一、大阪城本丸を残し、二ノ丸、三ノ丸を破壊すること。

一、織田有楽、大野治長より人質を出すこと。

一、城内の旧新諸將士が、前条について異議なき事の誓紙をさし出すこと。

この三条を、本多正純に持たせてやったのである。

こちらにとりあげる人質とは、淀君のことであった。

秀頼は、母を奪われるよりは、大阪城を灰にする方をえらぶであろう、と返答した。

で——家康は、大阪城本丸をはだかにする、という条件だけを秀頼に容れさせて、講和をしたので

ある。

しかし、家康は、淀君を奪うという肚を、すててはいなかったのである。

「但馬——」

家康は、俯向うつむいている但馬守へ、微笑し乍ら、

「わしが、淀君を人質にせねば不安でならぬ、とあせていると、思うたか？」

と、言った。

肚の裡うちみを看透みすされて、但馬守は、ちょっと、うろたえた。

「はは……、ちごうたな。わしは、わしの最後の妾として、淀君を望んだまでじゃ」

家康は、あっさりと、言つてのけた。

主君の意外な言葉に、但馬守は、啞然あぜんとなった。

家康が、おのが妾に、後家をえらぶのは、あまりにも有名であった。家康は、決して、季女しよとこを物色しなかった。家臣の女に、どんな絶世の美女がいても、目もくれなかったのである。

「但馬には、わしの気持は、わかるまい。わしは、太閤の後家を、妾にしてやりたい、と以前から、考えて居つたのじゃ。太閤が在世の頃から、ずうつとな」

そう言われて、但馬守は、おぼろげ乍ら、家康の気持が、わかるような気がして来た。

秀吉が、君臨していた時代、その傍かたえに坐した艶麗無比えんれいむひの寵姫ちやうきに、ひそかに、欲情をひそめた遠い視線を送っている家康の姿が、彷彿ふたふたとした。

「わしの寿命も、あと数年であらう故、やるべきことは、やっておかねばならぬ。……目下のわしが望みは、淀君を妾にすることだけじゃ、と申したら、嗤わらうかの、但馬？」

「いえ……」

但馬守は、両手をつかえて、家康の顔を仰うかがうとはしなかった。

「はは……、心まかせに言うた。思案が成らば、やって呉くれい」

家康は、立って、寝所へ去った。

その夜、但馬守は、急使を、故郷柳生谷へ、趨はしらせた。

柳生谷には、末弟十左衛門宗章むねあきが、永年の武者修業を了えて、帰って来ている筈であった。

十左衛門は、宗矩が、剣を交えて、教えた唯一の肉親であった。まだ、二十代なかばになったばかりであった。

柳生の名をはずかしめぬ天稟てんぽうを誇る逸材いっさいであり、いままた、孤独な武者修業を積んで、どれだけ腕をみがいたか、大いなる期待があった。

武者修業の間の噂は、殆どほとんときこえていなかった。達人名人と称される兵法者ひょうほうやと、一度もたたかった様子はなかった。

ただ、二年ばかり前、親戚の松平出羽守直政の邸宅へ、飄然ひょうぜんとして現れた折の振舞いだけが、但馬守の耳にとどいていた。

松平邸には、恰度ちやうどその時、奥羽随一と称せられる兵法者が、滞在していたので、直政は、十左衛門に、是非にと仕合を所望しょうぼうした。

十左衛門は、迷惑の態度を示しめしたが、相手の兵法者が、殺気をみなぎらせて、是非是非と所望するので、やむなく、承諾しょうだくした。

道場に入るや、兵法者は、壁にかけられた木太刀を把とろうとした。瞬間——差料携さしりょうげて、するする

と、背後に迫った十左衛門は、

「油断があり申すぞ！」

と、声をかけた。

兵法者が、ぱっと向きなおって、身構えるところを、十左衛門は、一閃の袈裟がけに、斬り伏せた。衣服を改めて座に就いた十左衛門は、出羽守に向って、

「それがしは、甚だ未熟者なれど、柳生一門にて候。兄但馬守宗矩は、將軍御師範役を相勤め居ります。されば、それがしが、このところにおいて、負けるようなことがあらば、流儀に疵がつき申すのみならず、將軍家の御兵法は、未熟なる流儀お稽古、と風聞が立つようなことに相成っては、公私に就いておもしろからぬ儀と存じ、不憫乍ら、手討ちにいたし候」と、告げた、という。

若年乍ら、思慮に富んでいた。

兄但馬守の依頼ならば、水火も辞せぬ十左衛門宗章である筈であった。

二

徳川家と豊臣家とのあいだに講和が成立した、ということは、しかし、いかなる人々にも、平和がとおとずれたという安堵を与えはしなかった。

大阪の街衢などは、いくさの前の状態よりも、かえって、さらに、殺伐の気がみなぎっていた。街辻で、武士たちが、些細なことから口論して、斬りあいになっても、人々は、べつに珍しい見物

とも思わず、屍骸が路上に横たわれば、あつという間に、賤民たちの手で、素裸にひき剝かれていた。今日も――。

大阪城の威容を彼方に望む太閤広場では、傀儡、猿楽、陰陽占い、猿引き、放下、輕業、手妻などにまじって、おそるべき兵法見物が、催されていた。

方四間の竹矢来を組み、その中央に、まだ若い牢人者が、着流しで、うっそりと立っていた。かたわらの鹿角の刀架けには、色とりどりの大刀が、七八本も、架けてあった。

口上を述べるのは、杖をついて、背中をまるめた座頭風の男であった。

若い牢人者が、用意の刀を、ことごとく、鞘をはらって、空中へ投げあげて、綾どりをする。希望の者は、矢来の内に入って、隙をうかがって、斬りつけてもらいたい。首尾よく、若い牢人者に、傷を負わせたら、小判十枚を頒つ。

但し、仕損じたならば、その者の生命は保障し難い。矢来に入る料金は、おぼしめしでよい。若い牢人者が、兵法修業のため催す興行である。

まことに、危険な見世物であったが、たちまちに、十人あまりの希望者があった。

若い牢人者は、胸でも思っているのではないかと疑いたくなるほど、顔面蒼白であった。眉目には、気品があった。冷徹な意志の持主らしい双眸の冴えた光を、宙に放って動かさぬ。

挑戦したのは、戦場往来の猛者らしいのとか、野伏みたいなのだとか、街の破落戸だとか、いろとりどりであった。いずれも、幾人の生命を舐らせたであろう白刃を抜きはなつと、若い牢人者を、ぐるりと包囲した。

「さあさ、ごろうじませ。竜の興るあれば、雲これに従い、虎うそぶけば、風自ら生ず。天下に示す

一心劍。これなん、飛竜の秘伝と申すべく、陰るときは、九地の下に潜み、動くときは、九天の上に陽われ、戦うときは、首尾ともに至り、震うときは、天地もまた崩る。一劍、腰間に潜むといえども、男児ひとたび鞘を払えば、賊兵凶徒恐れ、刃に、舐らさずして、天下治る。さり乍ら、いまだ示す、一心劍の奥義——来れば則ち迎え、去れば則ち送り、対すれば則ち和す、五五の十、二八の十、一九の十、是をもって和すと申す。虚実を察し、陰伏を識り、大は方処を絶ち、細はみじんに入る、活殺機に在り、変化時に応ず。その極意、虚ならばつけ込み、鏝ならば前後左右に身を転じ、微なるところを勝ち、幽なるところを抜かんず……」

「うるさいっ！ 牢人、はやく、白刃を空へ投げろ！」

破落戸の一人が、喚いた。

若い牢人は、無表情で、刀架けに寄ると、

「おのおのがた、それがしが、一刀を投げたならば、その瞬間より、仕合は開始したものと心得て、隙をうかがって、かかられい」

と、無敵な言葉を口にした。

——小面憎し！

どの顔も、憤りの色を刷いた。

「されば——」

若い牢人は、一刀を手を把るが早い、抜く手もみせぬ迅さで、鞘走らせた。

白刃は、宛然、目に見えぬ翼を持った鳥のように、一直線に、青空めがけて、翔けあがった。

つづいて、二本目が、三本目が、四本目が——一呼吸の間を置いて、鞘をはなれると、眩しく冬陽

を弾いてきらめき乍ら、飛翔して行つた。

八目だが、その手からはなれた時、最初の白刃が、空間を滑り落ちて来た。受けとめざまに、はねあげる。

誰がやろうときわめてやさしい業だ、とても言いたげな、無造作ともみえるその所作は、蟬集した見物人の目に、畏敬の色を泛べさせた。

包囲したのは、十三名であつた。

上段に、中段に、下段に、八双に——それぞれ、好みの構えをとって、蛇に似た目つきで、若い牢人者の瘦身の隙を狙つた。

若い牢人者の眼眸は、楯円を描いて舞う白刃の群へ送られている。と——。

どこに隙を見出したか、熊の毛皮を羽織つた野伏ていの男が、呟号しぎま、横あいから、斬りつけた。その跳躍を受けた若い牢人者が、一步も身を移さず、ただ、ひらっと、片手を旋回させた動作は、むしろ、緩慢にさえ見えた。

しかし、旋回させた片手が掴んだ白刃は、ただ一条の白い閃光と化していて、ぞんぶんに、相手の胸を薙いでいたのである。

野伏は、がくつと仰向けた顔から断末魔の濁った呻きを洩らしつつ、地に崩れ落ちた。若い牢人者は、そ知らぬふりで、白刃の楯円を描きつつける。

この神速の業を見せられた挑戦者たちは、平常の心理ならば、おのが腕前では、到底勝てぬと思ひ知って、退くのが、当然であつたろう。

数百の見物の目にかこまれた渠らは、一人斃たはされただけで退く臆病を、嗤わらわれたくなかった。このような危険を冒すだけあって、生命いのち知らずであった。腕前の差を正しく識るよりも、かえって、仲間の血汐をあびて、かつと狂おしい闘志を燃えたたせることになった。

ひきつづいて、さらにまた二人、猛然と斬りつけて、刃を噛み合せることも及ばずして、血煙の下に仆ふれ込むや、のこり十名は、その殺氣に野獸いもの猛氣を加えた。たしかに――。

八本の白刃を、受けとめては、投げあげる若い牢人者の姿は、あまりにも余裕よゆうがあり、包囲されてゐることすら忘れてゐるのかとき小面憎さがあつたのである。

「その催し、中止せい！」

矢来の外から、声がかつたのは、すでに、地面に、七個の死体むくろが横たわってしまった時であつた。声をかけたのは、大阪城の宿老織田有楽斎おだうらくさいであつた。

三

織田有楽斎は、信長の弟であつた。長益と言ひ、信長が生きてゐる頃は、特に挙げて記すべき武勲もたててゐなかつた。秀吉に仕えてからも、戦場で名を挙げることもなかつたが、なんとなく従四位侍従に進み、入道となつてからは、有楽斎と号し、茶博士として茶道において天下に有名になつた。

有楽斎が、英傑信長の弟に生れ乍ら、覇権はけんの争奪には加わらずに、風月の浄土じやうどに南面したのも、保

身の智慧を働かせたためか。舌頭忘味の人か。漫に茶と叫んで真を失った人か。

いずれにしても、大阪城の宿老であり乍ら、その攻防の軍議の席には、決して姿を現さぬふしぎな人物であつた。

矢来の中を鎮まらせておいて、入って来た有楽斎は、若い牢人者を正視すると、

「兵法達者を鼻にかけて、無益の殺生を犯して、衆目を怖れさせるのは、人倫に悖る所行。豊家の城下においては、許されぬ」と、たしなめた。

若い牢人者は、鄭重に一礼して、

「大阪城の御重役とお見かけつかまつる。それがし、幼年より、木曾山中に育つて、兵法修業のみに心身を傾けた者にて、世間に出てみて、人と交るすべを知らず、進むべき途を見出しかねて居り申す。願わくば、この聊かの腕前を、役立てる座をお与え下さるまいか」と、たのんだ。

有楽斎は、斜陽をあびた天守閣へ、視線を向けると、

「あれは烏有に帰すまでの、つかの間の美しいすがたじゃが、この時世に不服を抱く者の目には、永久の威厳をそなえたものに映るそうな」と、独語するように、言つた。

「お連れ下されい」

若い牢人者は、頭を下げた。

この光景を、矢来の外から——群衆の蔭から、見まもっていたのは、猿飛佐助であつた。